

感動と古代史(五)

——福士幸次郎先生に——

今井富士雄

七

日本古代史と云つたところでは何かがあるのか、埃及やメソポタミア、或は中国の殷墟に栄えたような古代物質文明があつたわけではない。希臘や印度に較べられるような精神文明があつたわけでもない。イスラエルのように、砂漠の神の伝統を人類二千年の福音と化したような、一人の宗教的天才を出したわけでもない。

何か値うちのあるものでないと学問の対象にしないという傾向は確かに学者にあるものだ、そこから無いものねだりをしたり、莊嚴化の爲めに美しい衣裳をかぶせたりする場合も往々にしてありがちになる。

我々が日本古代史を研究するのはそんな値うちのある古代文明があるからでも、無い価値を無理に創り出す爲めでもない、要するに正しく古代の実相を究めれば良いのであつて、

飽く迄も事の真実に学問的に深く迫つて行くより方法がないのである。価値があるから研究するのではない、研究するから自然と学問的な価値が生れて来るのである。従つて学問的对象の値うちも我々の主体的な働きによるのである。

昔、文化が栄えた、そんなことは我々にとつて何んであらう、埃及やメソポタミアの遺跡・遺物は今では観光の亦是博物館的価値しか持つていないではないか。成程、美術的造形的な価値はあるだろうが本當の意味の歴史的価値はあるだろうか。希臘文化にしても印度文明にしても、今日の我々に価値のあるのはその哲学なり宗教なりが直接に我々の精神に訴え、影響を及ぼすところがあるからである。中国の儒教はやはり今の我々にとつて道德的な根柢となり得るものを含んでいるから尙いのであつて、それでさえ若しも伝えられることが本當とすれば、同国人である魯迅にとつては近代化を妨げるけしからぬものであつた。彼はその意味で劇しく中国の礼

教を呪詛したのである。

古代文明の栄えたあととはただの砂漠になつたり、その子孫は遺跡巡礼者の為めの案内人に過ぎないものとなる場合すらあるのである。自分等の国に古代文明が無いことは恥ではない、むしろ現在に於て文明を持たないこと、或は文明の価値を現代に生かし得ないのが恥である。歴史の価値は結局は受取り方によるのであつて、同国人であるか否かにさえ関係はないとも云える。

一体我々日本人は日本の文化なり歴史に対して特別の先入見を持つてゐるように思う。それも元を正せば、古代に特別の文明がなければ困まると思つたり、何んでもかんでも自分の国は立派でなければならぬと思ふ慾目から文化や歴史を飾りたがる。裏をかえせば実は劣等感からそうなるのであつて、なかには本心に心から立派だと信じ切つてゐる人もあるだろうが、それも根拠は甚だ曖昧であつたり、正当でなかつたりする場合が多い、少なくとも私にはいまだ感服するような説が見当らない。

良かれ悪しかれ日本は島国であつて、所謂新しい文明は外部から入つて来た。先進文化の声におびやかされ続けていたために眼を大陸の方にばかり向けたがる。それも必ずしも悪いとばかりは云えない、場合によつては大変良い働きをして来た、外部の刺戟がなかつたら到底今日の日本とはならなかつたことも事実である。然しながら凡そ文明の名のつくもの

はすべて外来のものであつて、そればかりに頼つて開化して来たものと思ひ込むのもどんなものであろうか。静かに自分の国の歩みをふりかえり、外国の歴史との比較を充分したうえで、はつきりと自分の国の実体をつかんでみたいものである。それには事大的価値感にとらわれないことと、対象に即した正しい焦点を見つけることが必要である。

何故古代史を研究するのか。自分の場合には古いものほど文化や歴史の根源に近いものがひそんでゐるような気がした。その為めにはきまり切つた書物の歴史や、たよりない神話では本当の古いものは分らないと思われた。手で触れ、目で見ることの出来る遺物が一番確かなもののような気がした。考古学に対して興味を抱くようになったのもその為めである。あとでは段々とその夢も消え、考古学の限界も知るようになったが、初めは兎に角夢中であつた。確かに遺跡を歩るき廻つたり、発掘に従事してゐたりすると、言葉に云い現わせない一種特別の感じにおそわれることがある、今でも時々発掘してゐて遺物の出て来る夢を見ることもある。

中学の上級生の暑中休暇に級友達四五名と青森県の十三瀨に旅行した。湖畔の内瀨村の村長は奥田順造氏で、子息の啓二君が同級生であり、暫らく同君の家に滞在して遺跡巡礼をやつたものだ。熱心な奥田氏の話を聞いたり、實際石器や土器を手にしては若い我々は感激せずには居られない、それが

きつけになつて度々お邪魔をすることになった。帰途、あると思つた汽車がなく、五所ヶ原町から板柳町郊外の富士先生の処迄線路伝いに歩いたのも此の時である。

奥田氏を知つたことから東大人類学教室の中谷治宇二郎氏とも連絡がつき、昭和三年の夏には津軽地方一円から上北郡地方に及ぶ広範囲の発掘旅行にお供することになった。此の時の旅行は始めて考古学の専門学者と一緒に発掘をしたのであるから、私にとつても忘れることの出来ない事件であつた。

先づ南津軽郡山形村花巻で円筒式の遺跡を掘り、近年旧石器時代遺跡存否で問題になつた北津軽郡金木町の溜池附近、十三湖畔の福島城址の堅穴、長谷部博士が人骨を出したことのある相内村オセドウ貝塚、十三村の砂丘に懸仏の出る寺院址を見学、日本石器時代遺跡として代表的な亀ヶ岡では相当の収獲があつた。西津軽郡森田村の堅穴、中津軽郡裾野村十稜内、高杉村尾上山と岩木山麓を巡つたのであつた。文化財保護法もない頃でジャン／＼と掘つて廻つたのである。一日の工夫賃は金一円也で、半日仿いてもらつて五十銭銀貨一枚で感謝された時代である。中谷氏も東京附近に較べて安いのは驚いていた。大学から県庁に依頼状を出しておいて貰つたので、行き先き先きで親切にして貰い、村長自ら発掘に立合つて呉れた処もあつたくらいである。奥田氏も数日間一緒になられ、あれこれと学問的な話を伺つた。こんな場合に一番人柄

も良く分るし、学問的にも深い影響を受ける。中谷氏からも父上の遺言のことやら、物理学者になつた兄上のこと、若い時の志望や苦勞の話など色々なことを聞かされたものである。

芥川竜之介の短篇に「無名作家」というのがあるが、世の中には此んな有為な才能を抱きながら、世に出ないでうずもれた儘になつている者もあることを書いているが、実はあれのモデルになつているのは自分であつて、芥川の書いた中に出て来る自分の作品の筋は流石にチャンと書いてあつたということ。一時は小説家になるつもりで菊池寛に師事したこともあつた、その時では恰度横光利一の兄弟子になれるわけだつたなどと、山路を歩るきながら疲れてくると此んな自慢話も出るという具合である。時々兄上の宇吉郎氏と間違えられて閉口することがあつたそうだが、良く似た兄弟らしい。文章の達者な点も恐らく似ていたのではないかと思う。十三村の宿屋では奥田氏とも一緒に珍らしく酔い、久し振りに見る日本海の暗い海を背にしながら「日本海は故郷の海だ、オハラ節というのはやはり津軽にもあるが一つ唄いましよう」と民謡を唄つたりした。

此の時の旅行では当時日本の大コレクターとして有名な青森市の佐藤部(しとみ)氏の処へ一緒に連れられて行つたが、此れは全く驚くべき蒐集品ばかりであつた。此の時は既に大部分は東北大学に収まつていたわけであつたが、その残りの品物を一々手にとつて見せて下さつた。此等の遺物は現在で

は青森市の成田彦栄医師の戦時中にこしらえた土蔵の中に、佐藤氏から譲られた「人類学雑誌」初号以来の全部と共に珍藏されている。

青森から上北郡の七戸町に行き、成田巻治氏の宿屋に落着き、天間林の堅穴を見たり、貝塚村の貝塚を発掘した。此の貝塚は小山全体が相当の深さの貝層に覆われていて、生ましましい大きな鹿の角なども出て来て、遺物は円筒式の雄大なものが沢山出て来た。恰度此の時遺跡に居た土地の人の処に附近の沼で溺れ死んだむすこの知らせが届いて、その人の嘆声を聞いたのも妙に心に残っている。

此の時の青森県一円の発掘調査旅行で私は大体遺跡はどんなものか、遺物の出土状態を知ることが出来た。然しあとで考えてみると乱暴な発掘であつたような気がしないでもない。

「僕は今、文化とクロノロジーを考えているよ、その他のことは何んにも考えない」とフランス留学を前にして中谷氏が語っていた。学問的着眼は非凡で、抽象的能力に於て勝れていた。余りに割り切つた判断と行動は時に物議をかもしたり、多少人にきらわれるようなところもあつたが、要領良く仕事を進めて行く不屈さは学者にとつての利点であつた。学問のやり方にも一本筋が通つていふようなところがある。人類学教室報告の一冊として出た「注口土器の分類とその地理的分布」にしても、その前に書いた石七の分類法の発展したものとも云えるのではないかと思うし、遺物の型式分類に就

て良く整理をしているばかりでなく、地理的分布に就ても相当突込んだ想定をしている。型式分類から文化編年へ、地理的分布から文化伝播の問題へと本格的な問題へと迫る基本的な考え方の萌芽が既に見えていた。どちらかと云えば自然発生的な、道楽や趣味の域を脱しない人達の多い考古学・先史学界で、自覚的な方法論に立脚した研究を始めようとした意図は尙いものと思う。此の学問が単なる資料学以上の科学的なものとなる為めには今後大いに参考とすべきであろう。遺物そのものに執することなく、遺物を文化のメルクマールとして何事かを語ろうとした人である。

「考古学をやる者は、学問の為に遺物を研究するのであるから、決して遺物を自分の所有物としてはいけない、そんなことをすれば段々物に執着が出て、本当の学問は出来なくなる」と私を警めたことがあつたが、此れは考古学にたずさわる者への戒律として真に至言であると思う、やむを得ない場合の他は今でも私は此の事を固く実行している。物への執着から此の学問に入る人は多いけれども、その執着を断ち切つて、本当の学問に迄昇華させる人は少ない。然し亦執着に徹し切つて学問以上の芸術の世界に遊べる人は又別だ。

戦時中に重版が出て、発行部数も多かつた「日本石器時代提要」はフランス留学を前にしてほんの数ヶ月に書き上げた本であるが、分り易い達意の文章と相俟つて、初学者の好入門書である。初版の出版になつたのは出発の後で、索引をつ

くる仕事は私に残された。実際に泥まみれになつて発掘をする仕事よりは、健康上のこともあつたと思うが文献あさが得意であり、「日本石器時代文献目録」もその産物であり、実際には此れを利用する程の篤学者も少ないとは思ふけれども、石器時代に関する文献を全部自分の物にしたい気持ちから目を通してはカードをつくつたもので、此れには相当の年月を費していたらしい。帰朝後、岩波から出した「日本先史学序史」は一冊だけでなく続刊の予定をもつたもので、文献あさりの特色が鮮かに発揮されている。徳川時代の考古学に関する文献の歴史的研究をしているわけだが、実は甚だ野心的なもので、新しい学術上の結果をたくみに織り込んでゐるので、決して懐古的な物好きなものではない。日本の先史時代に就ての一応の見透しの上に立つて書かれてゐる。一度日本の土地を離れて大局から見直した点など、留学のたまものと思われるようなところがあつて、此処に一つの行き方と立場を見付けたものと云える。此の場合にも文献資料の研究から学ぶべきものは吸い取りながら、自由にその資料を駆使して自分の学説に役立ててゐる。結論の爲めの証明に使われているきらいもないではないし、また何処迄発展させ得るかも疑問ではあるけれども、あまりに実証にばかりとらわれ、何んの爲めに苦勞をしているのか分らないようなことになり易い状態に對しては好刺戟となるべきものと思う。当時の学界では遺物編年の問題が専ら論議の中心であつて、而も実証的に統

々と成果の挙がりつつあるところで、中谷氏は方法的にも別派をなしていた。「何も一々発掘しなくても編年ぐらゐは出来るさ」と、カリエスの身を病床に横たえながら私に豪語したこともある。その時は大きな紙に石器の分類図を描きながら得意とする型式学的な構想に耽つていたらしく、「君が若し石器時代の研究をやるなら、これが出来てからやつたら良い」と云つたので、流石にえらいとその意気込みに感心したことがあつた。惜しい人を亡くしたものである。

三年間のフランス留学から帰つた中谷氏はカリエスになつて、北九州の由布院温泉で療養生活をおくることになつた。その頃私は京都大学の哲学科の学生で、卒業後は亦大学院学生として考古学教室に席を置くことになつたが、一応考古学が私の念頭から離れてゐた。正月休みを利用して御見舞の爲めに由布院温泉へ行くことにした。別府通いの船から見ると瀬戸内海の風景は素晴らしかつた。北九州の名山由布岳の相当高い麓を越えて行つたが、高い処から見る由布院温泉の景色も亦忘れられない。寒い京都から行つたので、尚更その色合いは何んとも云えなかつた。中谷さんは土蔵を改造した日当りの良い病室に寐た儘であつた。数日の滞在中でも学問に對する情熱はあり／＼と感ぜられ、動かないで寐た儘にしては元氣であつた。フランスに行つて一ト月目にはフランス語で向うの人達に講演をしたとか、デュルケム門下の四天王の一人であるモスには可愛がられ、講義を聞いていても毎回自分

の名前が出ないことがなかったなどという自慢話もあった。

私とその頃感心していた「老子」の話をしたら、「そんなものは」とちよつと云いかけ、そう／＼君は哲学の学生だったねと途中で気がついたか続きの話をやめたことがあった。療養生活もなか／＼合理的で、換気の為めには天井に水平の大きな開閉装置をつけ、寐ながら綱で自由に穴を開いたり閉じたり出来るようになっていた。咽喉が変だと云つては直ぐ薬をつけ、ああ具合が良いと直ぐ云つた。寐ながら図書目録に目を通しては附近の青年達に安い本を取寄せてやつたり、色々な種類の人が先生々々と云つては相談を持ち込んでいた。そんな状態でいながら読書も盛んにしていたらしい。あちらで会つた色んな人の面白い話などは正に短篇小説になるような味のあるものであった。フランスでも数種の論文を発表しアルスアデアチカに日本考古学概説の出版契約までしたが遂々仕上げることも出来なかった。若い時のことを信頼のける友人に聞いてみたら、純文学としてはどうか分らぬが、大衆作家としては相当なものになつただろうと云われた由、自分でもこれを肯定するような口振りで話をしていた。シベリア鉄道で欧洲に行く途中の屋根の変化を「科学画報」に載せた考察なども面白い文章であつた。愈々私が京都に帰る時になつて、その日は予定の時間にバスが大分遅れた。近い停留場から何度も引返しては窓の外から中の方をのぞかずには居られない私を奥さんが不思議そうな顔をして見ていた。虫の知ら

せと云うものか、それが最後の見おさめとなつたのである。九州でお会いした翌年は病氣も漸く固まりかけ、起ち上る練習などをしたりしていたらしい。北海道大学の方に赴任することになつたから、京都に居たら途中で会いたいという手紙まで貰い、再会を楽しみにしていたのに、何かのきつかけで急激に病勢が革まり遂に昭和十一年三月、僅か三十五才の若さで亡くなつたのである。

中谷氏を知つてから十年間、中学を出た頃から大学を出る頃まで、途中留学で会わなかつた時期や、私の哲学科入学などで、考古学に専念してばかり居たわけではなかつたが、離れていても絶えず手紙をいただいていた。彼自身の自慢話もあれば、しよげ切つた心情を吐露したものもあるが、どれにしても若い私に対する学問的な思いやりのこもつたもので、こまごまと行き届いた注意などは今でもまだ指針となるようなものばかりである。奥さんの手紙によると死期近い頃、井上靖・長谷川四郎君等とくわだてた我々の同人雑誌である「聖餐」に頼んだ原稿を書く心算で居たらしい。題は「東北」ときまつていたとか。考古学の上ではたつた一人の弟子といつても良い自分が、その後十年近くも考古学の研究室に残り、教壇に立つて下手な講義をしながら、未だに学問的低迷を続けているのはまことに汗顔の至りである。

若い時には文士稼業を志したりして迷いもあつたらしいが、一たん先史学をやるときめ、東大の人類学の選科に入つ

てからと云うものは、まことに目覚ましい勉強振りだったらしい。寐てもさめても日本石器時代のことで頭を使つていたと思われる。横から見てみると要領が良過ぎたり、自分のことばかり考えているように見る人もあろうけれども、あんな行き方もたしかに学問の爲めには必要なことで、科学的研究法を身を以て示した一つの好例であると思う。

中谷氏が人類学教室に居た頃は学問熱心な若い学徒がそろつていた。机を並べていたのは八幡一郎氏で、そのうち赤堀英三氏とも親しくなつた。浪人時代から高等学校に入つた頃にかけて私は何度あの教室に行つたか分らない。外部からもよく人が集つた。中谷氏の後を追うようにフランスに留学し帰国後はやはり病弱の爲め本格的研究を遂げることなく若くして倒れた森本六爾氏もやつて来た。みんなが一緒になつては喫茶店で学問を論ずる。若い私はそばでハラ／＼するようにな気になりながらみんなの話を聞いている。あの頃の学界は今から考えても活気があつた。学問的にもどんな具合になつて行くのかと思うばかりでも楽しい時期であつた。

フランスに行くことになつて、本郷の宿屋に引揚げてきていた中谷氏を訪ねて来た森本氏の懷中から、梅原先生の書いた大きな古墳の報告書が出て来たりするので私も喫驚したものである。みんなが学問的闘志を抱いていた群雄割拠の時代であつた。中谷氏も此の中に育つた一人である。

人類学会の例会もなか／＼面白かつた。その頃東北大学に

居た山内清男氏の編年に関する話なども始めて聞かせて貰つた、聴く者に学問的興奮を与えたことを今でも覚えてゐる。薄暗い汚いあの教室は然し何んとも云えない独特の学問的雰囲気をつたえていたように思う。

成城高校に入つた頃は中谷氏はフランスに行つて人類学教室に居ない、然し私は時々行つたものだ。八幡氏の発掘を大勢の生徒と一緒に行つて参加したり、赤堀氏の北海道旅行にはお供をしたのもその頃である。北海道では利尻・礼文島のあまり人の行かないところまで行つた。先年青森県を廻つていたので、北海道的な特色はよく分つた。札幌では河野常吉翁と短時間病床で面会する事が出来た。河野一家に大変お世話になつた。途中仙台によつて、山内清男氏を訪ね、土器にうずもれたお部屋やら、解剖台の上に分類した土器を並べたのを見せていただき、氏一流の発掘の仕方を丁寧に伝授して貰つた。山内氏の処で見て貰つた尖底土器のお蔭で、札幌の河野氏のコレクションの中に尖底部のあつたのを発見出来た時はうれしかつた。出土地は青森県下北郡東通村とあつたが、近年になつて漸く本格的発掘が行われて此の種類の土器のその地にあることが確認された。

赤堀氏は京大の解剖学教室で足立文太郎博士の指導で学位論文の爲め現代日本人の骨格の測定に従事することになり、私も京都までその手伝いの爲めに出掛けた。数日間続けて白い頭蓋骨をテーブルの上にあげてカタコトと音をたてて仕事

をしていると妙な非情な気持ちになつてくる。私が二度目に奈良へ行く時恰度来合せた長谷川四郎君に助手の代理を頼んだ。始めは彼も吐き気を催して困つたそうだ。そのうち馴れてくると、骨には無駄がないものだと思つてきて面白いと思つた。そんな感想を聞いて感心したものである。此の時、折角関西に來たのだからと奈良へ行つた。法隆寺の壁画・薬師寺の如来・中宮寺の弥勒、百聞は一見にしかず、此の素晴らしさには参つた。東洋の美は希臘古典的な美とは違つた根柢に立っていることをおぼろ気ながら直感出來た。そしてその背後の世界を知りたい気持ちが湧然とわいて來た。

土器や石器を見れば夢中になつていた時代は過ぎて、私もなんとなく考古学に対しては懷疑的になつていた。「考古学は男兒一生の仕事になるか」と赤堀氏ともよく話をしたものである。赤堀氏は石器の仕事から離れて人類学プロパーに移つていた。科学的といふけれども、學問として人間のことを研究するのに、果してどんな意義がつかめるのか、自然科学ではないことは云うまでもないが、文化科学として法則をつかんだところでどうなるのか。今でも時々頭を悩ます問題が此の時既に心にきざしていた。此処に嚴然たる実体がある。此れは單なる眼を楽しましめる美術作品ではない。薬師如来を見た時には私はどんな風にして対すれば良いのか迷つた。此の感動は理窟でもなければうそでもない。「仏が此の世に存在する事を僕は疑わない、それは仏の美しさが僕にとつて真

実であるから、そしてその美しさは人間以上のものであるが故に。」成城高校文芸部の「城」にそんな書き出しの「薬師如来」を載せた。何か私は見てしまつたのだ。

土器や石器といへども物体である。古美術品といへども物体である。いづれも視覚を通して我々に訴える。考古学は遺跡・遺物によつて人類の文化を明らかにする。はたして文化とは何んであるか。考古学で扱う文化とは現象をさしているのか、然らば文化現象とは何んであるか。先史時代と云うけれど、歴史を持つということはどういうことであるか。しかも、ただ美しいとだけ見ては済まされない美術品がある。その奥と云うけれども、奥になにかあるのかそれともないのか。文明の黎明が私の心におとずれたのである。ふりかえつてみれば、色々な機因がもつと古くから心の中にあつたのに違ひない。福士先生や柳田先生に惹きつけられたのもそれだつたかも知れない、考古学や古代史に惹きつけられたのもそれだつたかも知れない。然し今では始源の問題の外に価値の問題が私の前に立ちふさがつてきた。そしてすべてはそこから改めて見直してみなければならなくなつた。日本古代史にしても、古代文明にしてもそこにはどんな価値が潜んでいるのか。それと我々との間にどんなかわりがあるのであろうか。それは科学的考古学や実証的歴史学では手におえない問題である。大学の志望は哲学科にきまつた。(未完)